

天津(あまつ)神社 立石考

日本先史古代研究会 会員 延原勝志

天津神社が浦伊部より現在の地(備前市伊部 629)に移ったのが西暦 1579 年(戦国の世)と伝えられる。天津神社参道を上がり本殿手前の随身門の西約 15mの所に、昔より南に傾いた立石がある。注連縄(しめなわ)を巻いた高さ 1m50cmほどの石は、注連縄がきいたのか、子供の頃の私もこの石には登ろうとはしなかった。近年巨石を見たり探したりする内に妙な事に気付いた。それはこの天津神社立石(これより東石と記す)の傾きに似たような角度・割れ目・傷・重なり等を持つ石=巨石が多い事だ。例のごとく磁石等を持ち、この東石を測ってみた。高さ約 150cm・傾斜角度約 76 度である。また今年前半に東石の正午の影の長さを測ってみた。冬至 12 月 22 日=183cm(約 6 尺)、大寒 1 月 20 日=165cm、立春 2 月 4 日=139cm(約 4 尺 5 寸)、雨水 2 月 19 日=113cm、春分 3 月 21 日(+1 日 3/22 日)=62cm(約 2 尺)、穀雨 4 月 20 日(-1 日 4/19 日)=24cm(8 寸)などである。しかし夏場に近づくに連れて、東石の上を木の葉が覆うため計測がほぼできないが、立夏の 5 月 5 日で影が北側に出来なくなると思われる。また、夏至 6 月 21 日には影が朧(おぼろげ)ながら南側に 24cm程の長さになっているように見えた。(東石の長さで季節が判る)。そして時刻も東石の頂点と、南の山の谷を結んだ線上に太陽が来ると正午であることも判った。(東石と山の谷で正午が判る)

そして東石より西約 8m の所に、もう一つ高さ約 180cmの立石がある。(これより中央石と記す) 中央石の頂点と東石の頂点を結ぶと、東の山の稜線のやや上が見える。中央石と東石は東西の関係にあり春分・秋分の、日の出はこの点より日(太陽)が昇る。しかし実際は山の稜線になるので季節はもう少し先にずれて、穀雨の時期ぐらいになる。(この地方の種蒔きの頃か?) 陰暦だった昔、農業等で太陽観測をする必要が生じ、神官が影の長さから季節を読み「そろそろ種蒔きの時期である」とか「台風の季節に入る頃である。」など村人に伝え、又、日の短い季節には、正午の時刻を太鼓等で人々に知らせたのかもしれない。つまり安土桃山時代、南蛮貿易などで磁石(羅針盤)が日本に持ち込まれ、いち早く東西を示す石組を置いたのであろう。

東石と中央石の関係はそのような役割であると想像できるが、中央石の真北に、もう一つ立石があることに最近気が付いた。この 3 個の石を見ると、楯築遺跡を思い出す。時代は異なるが 3 世紀中頃の日本最大の祭祀の丘である。(薬師寺慎一先生著「楯築遺跡と卑弥呼の鬼道」参照) 安土桃山時代にも伊部(忌部)天津神社の地で鬼道(道教)の祭祀が行われていたのではないかと想像する。今では北大窯へ上がる道があるので「南石」「西石」は無いが、天津神社の境内と推定できる土堀の内に「五つの石」は修まる。地元の古老に聞いても、南石・西石があったことはわからなかった。

余談になるが、日幡宮司の話では、天津神社本殿の下より「天太玉命」と刻印された鏡が一面出土している。その鏡は今本殿に神鏡として大切に祀られている。(古事記天孫降臨の段に忌部氏は天太玉命を祖とする記述がある) 又、忌部氏は古代宮中の祭祀を執り行った一族でもある。皆様も是非一度、伊部天津神社参拝に訪れて頂きます様ご案内申し上げます。以上で天津神社立石の私説と致します。 平成 22 年 12 月吉日 工房にて



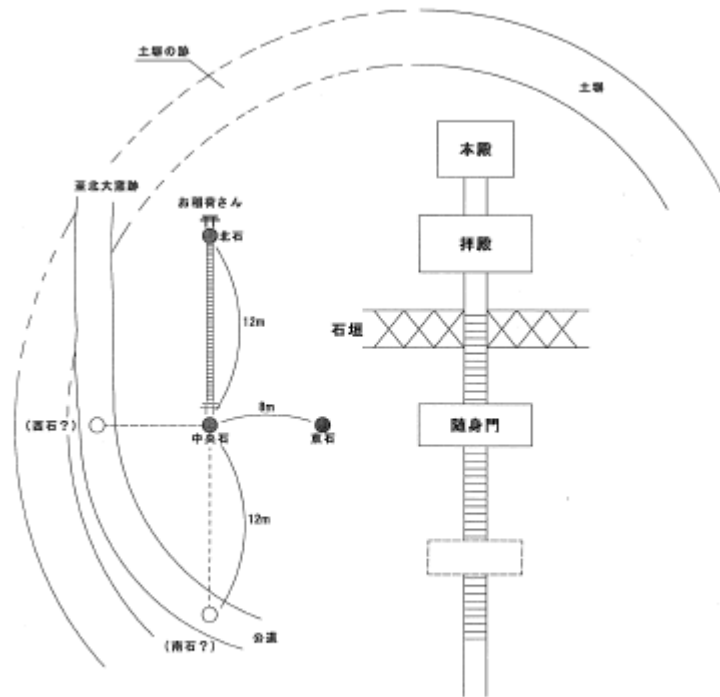
伊部の天津神社正面 備前焼の参道がすばらしい



中央石



北石



天津神社 立石 概合配置図 (延原作図)